Let`s know Hiroshima Castle.

しろうや！広島城

No.42

甲冑コーナー

～新しい仲間に会いに来て下さい。～

広島城天守閣第３層の甲冑コーナーに新しい仲間を迎え、久しぶりに一部展示替えしてみました。そもそも甲冑は戦場において身を守るための武具ですが、デザイン・仕組みは、武器や戦術の変化に対応して日本独特の変遷を遂げてきました。美術工芸品としても素晴らしいものがたくさんあります。

今回は、甲冑の歴史と進化をかいつまんでお話し、新着資料の紹介をしましょう。

■ 甲冑の歴史

いわゆる日本の甲冑は、古くから小札（こざね）と呼ばれる穴のあいた小さな鉄板や革板を糸や革ひもでとじ合わせて構成されているのが特徴です。平安時代の中頃には、武士の誕生とともに日本式の大鎧（おおよろい）というものが出来上がりました。その後変遷する甲冑の基本形です。機能に加え美しさも追求され、一部の高級武士だけが身に着けることを許された豪壮華麗なものでした。

ところで、私たちは普通に「よろいかぶと」といいますが、実は鎧というのは、正式には大鎧のことを指します。大鎧を含めて甲冑と呼びます。で、この大鎧がとにかく重い。鎧だけでも25kgくらいの重さがありました。とことん騎射戦仕様の甲冑で、馬上では鞍に支えられ、人には負担がかからない仕組みになっていましたが、いったん馬を下ると肩に全重量がかかって自由に動けませんでした。鎌倉時代末期以降、戦闘の形が一騎打ちの騎射戦から徒歩武者による地上集団戦になると、動きにくい大鎧はだんだん使われなくなりました。

大鎧がすたれると、代わって胴丸や腹巻が主役となりました。どちらも元々は下っ端武士用のものでしたが、大鎧に比べて断然動きやすいので、兜や大袖などを追加してセレブ感を出し、上級武士も着用するようになりました。胴丸と腹巻は一見同じように見えますが、どこで引き合わせるかで区別ができます。右脇で引き合わせるのが胴丸、背中で引き合わせるのが腹巻と覚えておいてください。

右脇で引き合わせる

胴丸は大鎧と同じ頃にできていました。腹巻はそれより遅れて鎌倉時代の初めに生まれました。胴丸よりも手軽に着用でき、体型に合わせて調節できるという利点がありました。ただ、背中にすき間ができるのが弱点でした。そこで、後にはすき間を補う背板が登場します。敵に背中を見せるなんて、武士にはあるまじき行為だったので別名臆病の板とも呼ばれました。そうはいっても背中があいているのは不安ですよね。

背中で引き合わせる

戦国時代になると一層戦（いくさ）の規模は大きくなり、武器は主力の槍に加え鉄砲の登場によって、甲冑もそれらに対応し進化します。より頑丈で、動きやすく、且つすき間のないものが作られるようになりました。これらは当世具足（とうせいぐそく）と呼ばれました。当世とは「今風の」、具足は「全て備わっている」という意味です。つまり「今風の完璧甲冑」といったところでしょう。中でも、小札を用いず板札（いたざね）と呼ばれる大きな鉄板を用いた胴は強い防御力を持つ画期的なものでした。

1枚板の胴の当世具足

当世具足はまさに今風、自由でした。胴丸の構造を基本にしつつもいろいろな種類の甲冑が現れ、個性を競いました。異国の甲冑をアレンジしたエキゾチックな甲冑も現れました。

なんでもありの復古調

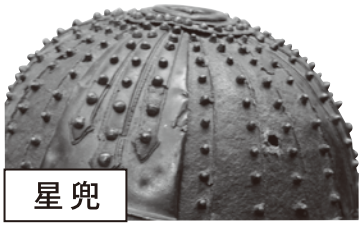
さらに時代は飛んで江戸時代。戦のない太平の世になると、甲冑の需要は少なくなります。古いものを懐かしむ風潮がおこり、中世の大鎧や胴丸、腹巻などを基本にした復古調と呼ばれる甲冑が流行しました。特に金持ちの大名は工芸技術のありったけを取り入れた豪華絢爛なものを作り、家門の品格を示す表道具となりました。

畳兜を畳んだところ

もちろんいざという時のために実用的な甲冑も備えました。中にはコンパクトに収納できて持ち運びに便利な畳具足と呼ばれるものもあります。

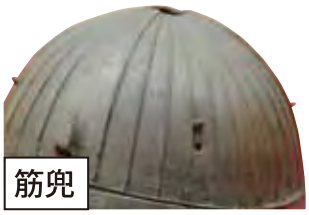
胴だけでなく、兜の姿も時代と共に移り変わります。

大鎧とセットになっていたのは星兜（ほしかぶと）です。三角形の鉄板を重ねながら鋲でとめて鉢にし、吹返やシコロなどの部品を付けました。突き出た鋲を星と呼びました。重いもので６kgを超え、プラス大鎧が25kgとして、腰には長い太刀を下げて、矢と箙（矢入れ）しょって、弓持って・・・そりゃあ馬から降りたら動けません。



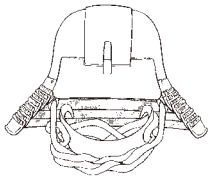
星兜

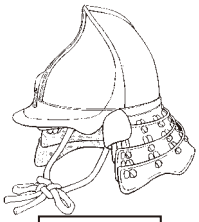
鎌倉時代が終わるころには、星を削って表面をツルツルにし、鉄板の端を折り曲げた筋兜（すじかぶと）と呼ばれる兜が生まれます。星兜は大鎧には似合いましたが、軽快な胴丸や腹巻には重々しく感じられ、スマートなデザインの筋兜が流行したといわれています。


筋兜

さらに室町時代になると、星兜や筋兜に比べてずっと簡単な作りの頭形（ずなり）兜、桃形（ももなり）兜などが作られるようになります。鉄板の枚数が少ないので大量生産が可能で、槍や鉄砲の弾をはじきやすいということから爆発的に広がりました。

そして兜もその後自由に進化していきます。大量生産→同じ形がたくさん→目立たない→アピールできない→それはまずい。ということで、派手な色にしたり、個性的な立物（たてもの）をつけるようになりました。立物とは兜の飾りのことで、装着場所によって前立・脇立・頭立・後立といいます。


頭形兜


桃形兜

知っておくと得した気がする甲冑用語

甲冑の解説文には漢字が並んだ名前がついていて、つい見なかったことにされがちです。少しでも甲冑と仲良くなれるよう基本的な用語のいくつかをご紹介しておきます。

小札（こざね）	甲冑を構成する鉄や革の小さな板。糸を通すための穴が空けてある。鉄製ばかりだと重くなるので、バランスよく革小札と混合することが多い。
威（おどし）	糸や革ひもで小札を上下に連結すること。横に連結することはとじるという。
威毛（おどしげ）	威す糸やひものこと。素材には糸、韋（かわ）、織物がある。
毛引威（けびきおどし）	威し方にもいろいろあって、基本的な方法。すきまなく威すこと。
素掛威（すがけおどし）	まばらにとじながら威す方法。すきまがあく。
二枚胴（にまいどう）	前後２枚の作りになる胴。左に蝶番をつけ、右で引き合わせる。枚数に合わせ３枚胴、４枚胴、５枚胴・・・という具合。
鉄黒漆塗（てつくろうるしぬり）	鉄地に黒漆を塗ること。朱漆なら鉄朱漆塗。茶なら茶漆塗。
鉄錆地（てつさびじ）	わざと錆を薄く浮かせた上から特殊な漆で錆止めを施す手法。こげ茶色で艶消しの渋い仕上がりとなる。「かなさびじ」ともいう。
草摺（くさずり）	胴の下に垂れ下る腰回り、太ももを守る部品。大鎧は４間(４枚)だったが、足さばきをよくするため数が増えた。胴丸は８間、腹巻は７間が基本。
○○間（けん）	星兜や筋兜の表面の板と板の間を１間という。六十二間であれば62枚の板がはぎ合わせてあるということ。ただし、表面に地板をかぶせている場合もあるので、実際のはぎ板の数と一致するとは限らない。
天辺（てへん）	兜のてっぺんのこと。星兜や筋兜には天辺に穴が空いている（天辺の穴）。束ねた髪を烏帽子（えぼし）で包みここから出して兜を固定していた。頭に矢が刺さっては元も子もないので次第に穴は小さくなった。

お待たせしました、新着資料の紹介です。お城に来て実物を見ていただきたいので、写真は控えめにしておきます。

①

①「黒韋威腹巻　大袖付」　室町時代中期

韋とはなめした柔らかい革のこと。鉄の小札を藍で深く染めた鹿革でとじ合わせた腹巻です。大袖がついていることから、上級武士の着用品であることがわかります。

同じく室町時代の胴丸を隣に展示していますので、比べて見て下さい。

②

②「鉄黒漆塗紺糸素懸威腹巻具足　頭形兜付」江戸時代

鉄板札製の腹巻はあまり目にすることができない珍しいものです。とても個性的な後立が目を引きます。何を表わしていると思いますか。

③「紺糸素掛威二枚胴具足　畳兜付」江戸時代

幕末の広島藩医の所用の甲冑。飾り気がなく簡素でありながら気品ある仕立です。さらに、胴も兜もコンパクトに収納できる実用的な仕組みになっています。前立に見える羽根飾は浅野の合印です。合印とは、戦場で敵味方がすぐわかるように色や形を統一した立物などのことをいいます。

③

④「鉄錆地六十二間筋兜鉢　銘明珍信家」室町時代末期

明珍は超人気高級甲冑ブランドのひとつで、その中でも信家の筋兜は幻の兜といわれるほど。きらびやかではありませんが、端正なプロポーション、乱れのない筋。高度な技を見せつけるかのような、ほぼ真円の天辺の穴にも注目です。

④

⑤

⑤「鉄黒漆塗六十二間小星兜鉢」室町時代末期

筋兜を得意とする信家でしたので、星兜はさらに幻の幻といえましょう。星が小さいものを小星と呼びます。

信家の筋兜、星兜合わせて３頭・・・、甲冑ファンのみならず、いつまでも眺めていたい逸品です。

しろうや！広島城

編集・発行

公益財団法人広島市文化財団
広島城
〒730-0011
広島市中区基町 21-1
電　話：082－221－7512
ＦＡＸ：082－221－7519
平成27年1月30日発行

広島城利用案内

開館時間：9：00～18：00
（12月～2月は 9：00～17：00）
入館の受付は閉館の30分前まで

観 覧 料：大人370円（280円）
シニア（65歳以上）高校生180円（100円）
小人無料（　）内は30名以上の団体料金

休 館 日：12月29日～31日 臨時休館あり
ホームページ　http://www.rijo-castle.jp

携帯サイト

「しろうや！広島城」のバックナンバーは、広島城のホームページからダウンロードできます